町医者だより

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器内科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
２分ミスタードーナツ並び
ヘアサロンAsh向かいビル2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器内科

令和05年12月号

アルコールは発がん物質

過度の飲酒は肝臓疾患に関係あることは皆さんもご存じだと思いますが、安全な飲酒量はいまだに不明ということをご存じでしょうか。そしてタイトルにあるように、アルコールは発がん物質と認識されています。特に、口腔がん、咽頭がん、喉頭がん、食道がん、大腸がん、直腸がん、肝臓がん、乳がん（女）の発がんに関与します。また、飲酒関連の癌は喫煙関連の癌の好発部位でもあるため、喫煙状況の把握も大事であると考えられています。

発がん性の検証で覚えておかなければいけないことに、reverse　causationという現象があるとのことです。日本語で逆因果律というそうです、診断される前の癌の症状で飲酒が続けられない状況だったのに、飲酒をやめた後に癌が分かった場合、飲酒をやめたためかえって発がんのリスクが高くなってしまったように見えてしまいます。口腔がんでタバコの喫煙本数と飲酒量を補正した解析によると、飲酒をやめた期間が4年以内で口腔がんの発症が１９％の減少、５～９年の禁酒で２３％の減少、１０～１９年の禁酒で３４％の減少、２０年以上の禁酒で５５％リスクが減少すると報告されています。食道がんでは、５年までの禁酒で、かえって食道がんのリスクが上がります（先に述べたreverse　causationが起きているようです）が、５年から１０年の禁酒で１５％の減少、１０年から１５年の禁煙でも１５％の減少、少なくとも１５年以上の禁酒で６５％リスク減少が見られます。咽頭がんでも２０年以上の禁酒で３１％の発がんリスクの減少することが分かっています。大腸がんに関しては５．５年以内の禁酒で発がんリスクが３７％増加しますが、５．５年から１５年間の禁酒で３４％リスクの減少が見られ、１５年を超える禁酒で４８％減少します。これらの研究結果からみると禁酒が発がんリスクを低下させるには時間がかかるということです。韓国から２０２２年に発表された禁酒で発がんを減少するかというコホート研究で禁酒が発がんリスクを減少させないとの結果が出ているのも観察期間がわずか６．４年の観察だったからではないかと考えられています。

食道がんに関しては逆流性食道炎は発がんリスクと考えられています。一般的な食道がんは扁平上皮癌ですが、逆流性食道炎によって胃と食道の境目の粘膜が胃の粘膜に置き換わるバレット食道が母地になって腺癌が発生することになっています。しかしながら、昨年の英国医学雑誌には非びらん性胃食道逆流症（Non-erosive reflux disease）は食道腺癌のリスクにはならないと報告しています。プロトンポンプ阻害剤（PPI)の長期投与が食道腺癌の発生リスクを上げるという話もあって因果関係がはっきりしません。